



Title	＜紹介＞渡邊英理著『到来する女たち 石牟礼道子・中村きい子・森崎和江の思想文学』
Author(s)	胡, 家正
Citation	語文. 2026, 126, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

渡邊英理著『到来する女たち 石牟礼道子・中村きい子・

森崎和江の思想文学』

胡 家 正

本書が論じる石牟礼道子・中村きい子・森崎和江の三人は、いずれも九州・山口のサークル文化運動の交流誌『サークル村』に深く関わりながら、本格的な文筆活動を開始した作家である。『サークル村』は、戦後日本において、全体主義的・皇国主義的な国家とは異なる、新たな集団と文化の創造を志向した場であった。しかしその一方で、この場もまた男性中心主義や家父長制から自由ではなかった。石牟礼・中村・森崎は、こうした『サークル村』に内在する抑圧や限界を批判的に表現しつつ、そこから自らの「思想文学」をはぐくんできた。

本書において著者が提示する「思想文学」とは、文学を「女性たちの思想を胚胎させる言葉の器」として捉えるための概念である。そこで表現されるのは、階級・ジェンダー・民族などの差別や排除の構造に晒された女たちが、「他者と溶けあうような協働性」を通して、いかなる言葉と関係性を紡ぎうるのかという問いである。こうした「思想文学」とは、いまだ十分に名づけられていない女たちの生や声を、この世界に到来させる、表現運動としてのフェミニズムの実践でもある。

本書は五章から構成されている。第一章では、三人の作家の出

発点としての『サークル村』を取り上げ、その場において三人の表現がいかに立ち現れたのかを検討している。第二章から第四章では、三人のそれぞれの代表作を中心に、それらの作品が置かれた文化的文脈や、他の二人の文学・思想との交差を視野に入れながら、三者の「思想文学」を個別に精読している。これに対して第五章では、「流民」状態に置かれた女性たちという主題をめぐって、三人の言葉が交差する地平を横断的に考察している。

第一章では、まず三人の表現に通底する重要な論点として、九州の「南」という視座が提示される。それは男性たちによって描かれた九州南部像への批判的介入であるだけでなく、「北」と「南」の位階制とも重なる男女の位階制、すなわち「サークル」内部にも潜んでいる家父長制への異議申し立てでもある。こうした視点から、石牟礼・中村・森崎は病者・「狂者」、「流民」的農民、女坑夫といった周縁化された存在に光をあて、サークルという集団のうちにある健常者中心主義、中産階級性、そして性差別の構造を浮かび上がらせている。

第二章から第四章では、中村きい子『女と刀』（一九六六）、石牟礼道子『椿の海の記』（一九七六）、森崎和江『遙かなる祭』（一九七八）を中心に論じている。『女と刀』は、旧薩摩藩の下級武士の娘であった中村きい子の実母をモデルとした権領司キヲの生を描く伝記的小説である。キヲは、父から武士階級の精神を叩き込む「躰」を受けるとともに、武士階級の男性性の象徴とも言える「刀」をも継承した。そこには、自らのジェンダー的劣位を武士と

いう階級の優位性に依拠して乗り越えようとする、最初の抵抗戦略が看取れる。だが重要なのは、キヲがその「刀」を一度も抜かず、武力ではなく言葉による対話の姿勢を重んじる点である。さらに、伯母初女、ミツ女ら他の女性との絆を触媒とし、キヲは身分・階級・血縁の境界を越える実践をしている。著者はこの過程を、父から受け継いだ階級と性の規範を内面化しながらも、それを異化し、書き換えることで自らの「女の思想」を育んでいく過程として読解している。

第三章では、石牟礼道子の自伝的小説『椿の海の記』を中心に論じている。本作は、幼少期の石牟礼をモデルとする「みっちゃん」の語りを通して、とりわけ祖母である「おもかさま」という「盲目の狂女」の半生に光をあてる作品である。著者によれば、『椿の海の記』が描きだすのは、資本主義と人間中心主義に貫かれた工場の生産に対抗する、「生産ならざる生産」としての分解活動の循環である。すなわち、化学肥料によって土中の微生物を減らし、生態系の循環を荒廃させる生産至上の論理に対して、本作は、堆肥の活用によって微生物を別の生き物の糧に分解する持続可能な循環的分解・再生産の世界を提起している。また著者は、未広の遊女たちが「おもかさま」をケアすること、すなわち非血縁的な性産業従事者のケア行為に注目し、それを男性中心主義的な家父長制に抗う「ケアの倫理」の実践として評価する。つまり本章は、『椿の海の記』を「弱く儚い者たちを支えるケアの実践を、差別に抗し家父長制に抗う」女の思想文学として読み解いている。

第四章では、森崎和江『遙かなる祭』で描かれた露天商である香具師の世界を、戦後日本の労働・移動・階層構造という文化的文脈で読み解いている。ここでは、親分子分関係に象徴される男性中心的な集団性が描かれるだけでなく、「からゆきさん（海外で性産業に従事する日本人女性）」の系譜や植民地朝鮮との関係を通して、女たちが階級・ジェンダー・民族の交差する暴力に置かれてきたことが浮かび上がる。だが著者は、「からゆきさん」を単純な被害者としてではなく、日本の膨張主義や植民地支配の歴史とも絡みながら、ときに加害の側にも位置づけられる複雑な存在としても客観的に捉えている。

著者は終章において、失対人夫、街娼、「かわゆき」などと、名を与えられないまま周縁へ追いやられた「流民」状態の存在が、三人の「思想文学」においていかに可視化されるのかを繊細的に分析する。三人の言葉は、それぞれの視角から「流民」状態に置かれる女たちの声を掘り上げると同時に、その間にも共鳴と葛藤が存在していることを示す。こうした女性たちの不揃いな声を結びつけ、階級とジェンダーが交差する抑圧の構造を明らかにしながら、それに抗う三人の思想文学を読み解く本書こそは、フェミニズムの期する解放と抵抗をはらむ「女たち」の集団を、この世界に「到来」させるのである。

（書肆侃侃房、二〇二五年六月、三九七頁、二、四〇〇円＋税）